

他者と共に在る認知症高齢者の表現する姿

戸 田 由利亜 (千葉大学大学院看護学研究科)

谷 本 真理子 (東京医療保健大学大学院医療保健学研究科)

正 木 治 恵 (千葉大学大学院看護学研究科)

本研究の目的は、他者と共に在る認知症高齢者の表現する姿を質的に明らかにすることである。認知症高齢者は自分の意思を維持することが難しく、また他者に伝わる形で意思を表出することも障害されるが、いきいきとした意味深い時間を過ごすこともできる。本研究は統一的存在としての人間観を前提とし、個人の内的本質が環境との相互作用を通して、他者に見える形でどのように表れるのか、すなわち「表現」に着眼し、行為主体と受け手とを分断しない主客両義的な捉え方で現象を記述することを目指した。

介護老人保健施設に入居している認知機能低下のある80~90歳代女性5名を対象に、研究者自身が施設職員と共に日常生活援助を行いながら日勤帯に参加観察した33日間の記録を、質的帰納的に分析した。この記録は、言葉だけでなく動作や場面の状況も含んだ。

結果として、【今の生活で共に在る他者や物に経験・体験をつなぐ姿】、【人・物事・音楽が作る場に同調し、体で調和していく姿】、【動きかける他者のいる中で自分に向かっている姿】を含む21グループが明らかとなった。

表現する姿は、高齢者を今取り巻く関係性と培われてきた関係性が多層的に交錯する様相を浮き上がらせ、認知症高齢者自身の在り方がこの場と不可分であることを示した。表現する姿を視座に据え現象を捉えることで、看護者自身を含めた取り巻く環境と高齢者自身の培ってきた関係性を描出でき、多面的な対象理解の検討に活用できると考えられる。

KEY WORDS : expression, older people, dementia, environment

I. はじめに

日本では高齢化率は26%に達し、今や4人に1人が高齢者という超高齢社会に突入した¹⁾。さらに高齢人口に対する認知症有病者率は15%、数にして約439万人(平成25年)と推計されている²⁾。認知症を持つ人々は様々な環境で療養するため、認知症ケアの専門性の有無に限らない多くの実践者の育成が進められている。

認知症高齢者は、老年期にありかつ認知症による認知機能低下のために、日々の何気ない生活の中で多くの困難や危機に直面している。老年期は、死に最も近い時期にあり、身体的・精神心理的・社会的に様々な衰退や喪失を避けることはできない³⁾。同時に記憶力や推理力、理解力のような知的能力の衰退と、対人関係と相互行為の在り方の変化も体験している⁴⁾。したがって、認知症の進行に伴いそれまで生きる拠り所としていた能力の喪失を体験することで生きる不安を抱きやすく、自分の意思や自分らしく生きる権利を自ら維持し続けることが難しい側面を持っている。一方で、高齢者は自分の人生を

振り返って総決算し、自我を統合する時期⁵⁾でもある。ここでもやはり、認知機能の低下は自己の拠り所となる独自に歩んできた時間への振り返りや振り返る今の瞬間の記憶の維持を困難にさせる。つまり認知症高齢者にとって、日々の生活そのものが困難や不安に満ちた時間になる可能性があり、自我の危機にも直面している。

また、ケア提供者は認知症による心理・行動症状への対応や、言動やサインの読み取りにくさにネガティブな感情を抱きやすい⁶⁾ことがわかっている。つまり、認知症高齢者は自分自身の意思や記憶の維持が困難になるだけでなく、これを他者に伝わりやすい形態で表出し、ケア提供者を含んだ他者との新たな関係を構築したり、関係性を維持したりすることにも障壁があると言える。

しかし認知症高齢者とのかかわりで研究者は、かかわったその方が自身の記憶や見当識に曖昧さを持ちながらも、これまでの人生で培い身に付けてきた他者との関わり方や自己の意思やあり方を様々な言葉や仕草、動作などを通して表現し、何気ない日常生活の中でも意味深い時間を共有することができた経験がある。この現象からは、認知症高齢者が、他者と生活する中で培ってきた自身の力を発揮しいきいきと過ごしていることがわかる。

したがって、日々の生活の中で自分自身の意思や記憶、見当識の揺らぎがあり、自我の危機に直面する認知症高齢者にとって、それでも尚自身の意思やあり方をその人の培ってきた方法で表現している現象が存在し、これを明らかにすることで認知症高齢者がいきいきと日々を生きるための支援へと実践を導く視点が得られると考える。

認知症高齢者への回想法や音楽療法など療法の効果検証としての表情変化⁷⁾や、認知症高齢者本人の語りや言動からその意味や認識する世界を明らかにした研究は行われてきた。こうした認知症高齢者本人の語りや自己の表出に焦点を当てた研究は散見されるが、認知症高齢者と他者とのやり取りの中で生じる表現を明らかにしているものはない。

特に、言語的コミュニケーションの円滑さを喪失していく認知症高齢者は意思や自分のあり方を言葉の内容だけでなくむしろ非言語的な形態でも表示している。マーガレット・ニューマンは「拡張する意識としての健康」とした看護論⁸⁾において、人間が統一的存在であることを前提とし、「疾病を、私たちの身体を侵す実体 (entity) としてでなく、人間一環境の相互作用の発現するパターンの開示」としている。ニューマンは疾病だけでなくコミュニケーションや行動や動き、主観的時間や強い感情の動きもパターンの開示と位置づけ、人間は意識を持つものでなく、人間が意識であり、あらゆる環境との情報交流能力であるとしている。この人間観を前提とすると、認知症高齢者も自然や社会の一部として環境と内的つながりをもつ統一的存在であり、存在自体が意識であり、あらゆる環境との情報交流能力として常に環境との相互作用の発現するパターンを開示していると言える。認知症高齢者の表現は、この人間観を根底におく、認知症高齢者と環境との相互作用の発現するパターンとして位置づく。

したがって本研究は、人間が自然や社会の一部として環境と内的つながりをもつ全体的存在であるという前提に基づき、他者と共に在る認知症高齢者の表現する姿を明らかにする。

II. 研究目的

本研究は、他者と共に在る認知症高齢者の表現する姿を明らかにする。

III. 用語の定義

認知症高齢者の表出する態度や表情、言動などは、認知症高齢者が主体として表すものでありながら、目に見える形をとって現れた客体であるという主客両義的な性

質を持っている。さらに、認知症高齢者が他者を含んだ環境とのやり取りが生じる現象そのものに焦点化している。つまり表現する姿は、認知症高齢者と他者を含んだ環境のどちらのものとも弁別されない両義的で全体的なあり様と捉える。これを踏まえた上で、「表現する姿」を以下のように定義する。

「表現する姿」とは、個人の内的な本質が、態度、表情、反応、言葉づかい、体格、声色、立ち居振る舞いなど、他者を含んだ環境と相互にやり取りしながら構築され形象として表出した全体的なあり様である。

IV. 研究方法

1. 研究対象者

研究協力への同意が得られた、以下3点に該当する介護老人保健施設1施設の入居者5名とした。

- 1) 改訂長谷川式簡易知能評価スケール⁹⁾ (以下、HDS-R) または柄澤式老人知能の臨床的判定基準の評価¹⁰⁾ (以下、柄澤式) により認知機能低下を認める。すなわちHDS-Rで30点満点中20点以下、柄澤式で中等度 (+2) 以上とする。
- 2) 老年期にあたる65歳以上である。
- 3) 認知症以外の慢性疾患の有無は問わず、急性症状がない。

本研究では、取り巻く他者やものとやり取りする場面を豊富なバリエーションで記述するため、言語的コミュニケーションの有無およびその際の相手との意思疎通の取りやすさが異なる5名を選出した。

また、介護老人保健施設は、病院と自宅との中間施設で、多職種によりケアを受けつつ他者と生活を共有する居宅施設と言える。よって、多様な交流があると予想され、看護学実習の受け入れや職員教育に積極的で、質の高いケア提供に前向きな介護老人保健施設を選定しデータを収集した。

2. データ収集期間

2011年4月から9月

初めの2週間はデータ収集場所や対象者との関係を作るための期間として研修し、その後延べ33日間、日勤帯にデータを収集した。

3. データ収集方法

研究者1名が、対象施設の2フロアで午前9時から午後16時まで、施設現行の看護方針に沿って施設職員と日常生活ケアを行いながら、参加観察した。

対象者が施設で生活している場面 (研究者と対象者のかかわりだけでなく、他利用者や施設職員とやり取りする場面や対象者が一人で過ごしている場面も含まれる)

をフィールドノートに記録した。その場面における対象者の言動とかかわる人やもの様子を中心に記録し、できるだけ対象者の言葉だけでなくその時の動作や仕草、表情などの非言語的な様子も詳細に記述し、その場面の時間帯や場所の様子などの場に含まれる要素やその場面の状況を把握するための補足としてそれまでの経緯も追加して記録した。収集されたデータは、対象者を日常的に援助している看護管理者によって全て読まれ、内容の適切性や援助の妥当性についてスーパーバイズを受けた。

4. 分析方法

本研究では、対象者の動作や言葉一つ一つを場面から切り離さずに文脈を踏まえ、行為主体と客体の分離でなく、全体的なあり様として抽象化するために以下の手順で質的帰納的に分析した。尚、老年看護の研究に精通する複数の研究者からのスーパーバイズを受けて分析方法と内容の妥当性を保障した。

1) 個別分析

データを繰り返し読み込み、〈分析Ⅰ〉一場面に含まれる対象者の行動や発言一つ一つを端的な文章に整理した。〈分析Ⅱ〉『対象者の表現する姿』という観点から、分析Ⅰで整理された複数の文章で構成される場面をまとまりのある単位に区切り、要約した。〈分析Ⅲ〉では、分析Ⅱで抽出した要約を抽象化し〔～姿〕という形で命名した。〈分析Ⅳ〉命名されたテーマを類似性に着目して集約し、最終的にこれ以上類似性を見出すことが出来ない段階まで繰り返した。最終的に集約されたテーマのまとまりを一つのカテゴリとし、これを端的に表すカテゴリ名を命名した。

2) 全体分析

対象毎に統合したカテゴリを全て用い、さらに類似で集めグループ化した。

5. 倫理的配慮

本研究は、2010年1月に千葉大学大学院看護学研究科倫理審査委員会において承認を受け遂行した。特に配慮した点について、以下に述べる。

対象者の安全性と任意性を保障するため、データ収集前に研修を行い、対象候補者が研究者の存在に脅かされていないことを看護管理者に確認した。研究協力への同意で対象者の明確な同意の表出または署名が困難な場合は、家族にも書面を用いた説明し、署名をもって同意を得た。同時にデータ収集期間中も、研究者が介入することへの拒否や不快がないか職員に観察してもらい、必要に応じてデータ収集の中止を検討できるよう配慮した。

また、収集された場面に職員および家族が含まれる場合があることは研究協力への説明時に職員、家族に伝えた。さらに実際にデータに含まれた場合には、その場でデータに含まれることを再度口頭で説明し、同意を得た。

V. 結果

本研究では、対象者5名の場面の記述から、21グループの他者と共に在る認知症高齢者の表現する姿を導出した。以下に対象者の概要、施設環境の概略を示し、分析結果について後述する。

1. 対象の概要

対象者は、表1に示す80～90歳代の女性5名であった。

2. 生活環境の概略

対象施設は住宅地や団地の多い郊外のはずれに位置し、近隣には大きな公園や川があり緑が多い。全3階、約90人の利用者が入居し、各階は東西に長く、両端に食堂とサンルームが位置し、食堂と廊下には4床または個室の居室が面する。壁には各行事の写真や手作りの掲示物が飾られ、食堂にはテレビが設置されていた。アク

表1 対象者の概要

	性別	年齢	要介護度	入所期間 (入所回数)	認知機能評価	既往歴
A	女性	80歳代前半	2	約9カ月 (初回)	HDS-R 18/30	甲状腺機能亢進症、高血圧
B	女性	80歳代前半	1	約14カ月 (初回)	HDS-R 9/30	脳梗塞 (H21 左脳梗塞による後遺症で右半身に軽度麻痺残存)、認知症
C	女性	90歳代後半	3	約6カ月 (5回目)	HDS-R 3/30	アルツハイマー型認知症 (H12頃～)、高血圧、慢性心不全 (H19)、脳梗塞、大動脈弁狭窄症
D	女性	80歳代後半	4	約2カ月 (初回)	柄澤式 +3	認知症 (H19頃～)、高血圧、糖尿病、大腸癌手術後 (人工肛門)、大腿骨頸部骨折
E	女性	90歳代前半	3	約1カ月 (10回目)	HDS-R 6/30	一過性意識障害 (H22.9)、脳梗塞後遺症 (H9)、認知症、左右変形性膝関節症、腰部脊柱管狭窄症

ティビティは各階の食堂で行い、入居者の多くが日中を食堂で過ごしていた。

対象者A, Bが入居する階の入居者約15名は日常生活動作がほぼ自立しており、看護師と介護士各1名による支援を受けていた。食事や体操、折り紙などを食堂に集まって行う時間が設けられていた。対象者C, D, Eが入居する階の入居者30~40人の大多数が生活動作に見守りや介助を要し、身体介護の必要度や認知機能障害の程度が高かった。看護師2~3名、介護士4~5名が配置され、午後には参加可能な15名ほどの入居者が食堂に集い、体操やレクリエーションを行う時間を設けていた。食事はそれぞれ食堂のいつもと同じ座席で摂れるよう配慮されていた。

3. 分析結果

個別分析結果全56のカテゴリから、全体分析で21グループを導出した。対象者別の場面数及びカテゴリ数を表2に、全体分析結果を表3に一覧する。

表2 個別分析で導出した対象者別の場面数とカテゴリ数

	記述された場面数	カテゴリ
A	34場面	10
B	40場面	11
C	25場面	11
D	27場面	9
E	33場面	15

以下に各グループについて一部場面の記述を示しながら説明する。以下、【 】内はグループを下線部は場面の記述を示す。

1) 【今の生活で共に在る他者や物に経験・体験をつなぐ姿】

対象者らには、これまで生きてきた中で触れてきた、職業経験、他者や自分との裏側といった人間関係、自然や家族とのふれあいがあった。今施設で生活する対象者らの目の前やその手に、その経験が自ずと身のうちから動作や言葉にしみ出してくるような、過去の経験とのつながりの深いものや寂しさといった感情、慣れない若輩者、窓の外の景色や生花が存在したこのグループの場面では、対象者らは今の生活で共に在る他者やものを接点にし、その手の中にあるものを慣れた手つきで扱い、若輩者に教え語りかけることで過去の経験を今につないでいた。対象者Aの一場面を例示する。

昼食の準備が始まるころ、研究者が挨拶しながら部屋の中へ入っていくと、対象者Aは研究者の顔を見るもまたすぐに床頭台の方へ向き、眉を下げて困ったように

見える表情をしながら「私の上着がないのよ」と、震えた声で言う。着ている黒い上着の前をつかみながら、「これはね、私のじゃないのよ。人のものなの」と言い、出してはしまつてを繰り返す。その動作を続けながら、「こうやってね、どこに行ったかなんだかわからないよではね、困るのよ。これも自分のものじゃないでしょ」と、眉間に皺をよせながら、暗い口調で話す。ベッド柵に手を伸ばし、かかっている服をなでながら、「自分の家でもないしね、着てるものも自分のものじゃなくて、寂しいのよ」と言う。家族も来ないと言い、ベッドに座る。

研究者に家族について聞かれると、対象者Aは「長男はね、亡くなったんですよ」と寂しそうに表情を緩ませる。「長男はね、大学を出て就職したんですけどね。良い子だったの。学生の頃からお母さんって、本当に良い子だったのね。良い子に限ってなくなっちゃうんだもの」と部屋の壁の方に視線を向けながら、柔らかな表情で語る。壁の時計で時間を確認した対象者Aは、研究者から食堂に人が集まり始めていると聞くと、対象者Aは自室を出て食堂に向かった。

2) 【自分自身でも揺らぎつつ、それでも探し続ける姿】

対象者は、引き出しの中から自分のもので必ずあるはずの何かを探しているが、その場所も探しているものさえも揺らいでいた。引き出しを開けたり閉めたりを繰り返して物体そのものの自体を探す動作を続けながら、自分自身の中で探している何かをも探し続けていた。

3) 【最後まで熱心に手作業に参加する姿】

対象者は施設のアクティビティとして参加した手芸や花の仕分けに参加し、その集中した時間に最後まで熱心に存在していた。

4) 【作ること・参加することの満足感に浸る姿】

毎週の手芸クラブに参加し、他の参加者よりいち早く取り掛かってコツコツと作ってきた巾着が完成するその瞬間、大好きなカラオケに一番いい席で参加できた帰り道、他者から賛辞の言葉をかけられながら、対象者は嬉しさや満足感で充足された時間と空間に浸っていた。

5) 【共にいてくれる他者へ感謝を伝える姿】

自分の生活の手助けをしてくれる職員や周囲の他利用者には言葉だけでなく、丁寧な物言いや態度でしっかりと応じて相手に感謝の意が伝わるように接していた。

6) 【相手をたしなめつつ自分を律しきれない姿】

あまり他の人のことは悪く言わない方がいいと他利用者の言動についてたしなめつつも、対象者自身も他者を非難してしまうこともあり、そのような今の人間関係の中で律しきれない自分があることを自覚していた。

表3 「認知症高齢者の表現する姿」21グループと下位カテゴリ

グループ	集約されたカテゴリ (対象)
今の生活で共に在る他者や物に経験・体験をつなぐ姿	【今の自分の生活や目の前のものへ過去の体験や経験をつなぐ姿】(A) 【他者や自分の裏側を色々研究者に教えていく姿】(B) 【自然に触れる経験を通した楽しみを若輩者に語りかける姿】(E)
自分自身でも揺らぎつつ、それでも探し続ける姿	【自分自身でも揺らぎつつ、それでも探し続ける姿】(A)
最後まで熱心に手作業に参加する姿	【最後まで熱心に手芸や花の仕分けに参加する姿】(E)
作ること・参加することの満足感に浸る姿	【作ること・参加することの満足感に浸る姿】(B)
共にいてくれる他者へ感謝を伝える姿	【自分に働きかけてくれる他者へ感謝の意を伝えつつ丁寧な物言いや態度で応じる姿】(D) 【世話になる方々へしっかりと感謝の思いを伝える姿】(E)
相手をたしなめつつ自分を律しきれない姿	【相手をたしなめる自分も密かに他者に非難や余計な言葉をこぼしてしまう姿】(B)
他者への控え目な言葉と裏腹な行動をとる姿	【控え目に謙遜し相手へ譲歩しながらも、言葉と裏腹な行動をとる姿】(E)
働きかける他者のいる中で自分に向かっている姿	【他者からの働きかけには応えるが、自分だけの過ごし方を続ける姿】(C) 【周囲に構わず目の前の物事に淡々と向かう姿】(D) 【他者のいる場で周囲との交流が途切れている姿】(E)
過去を想起し、今ここで抱える思いを傍にいる他者に明かす姿	【今ここで生活する自分が実感する周囲の人や物、自分自身の移ろいゆく様を他者に明かす姿】(A) 【混乱する今の自分でも、ふと思いつき起こされる過去とこれからの傍で聞く他者に語る姿】(B) 【共にいた他者に、何もしないで終わったことを話す姿】(B) 【過去を思い今を見て生じる、今抱える諦念や業を様々な表情で共にいる他者に明かす姿】(E)
了解し認める自分をもって他者に応じ収めていく姿	【自身で了解していることに従って、他者に伝え行動する姿】(C) 【自分を通して案じられる他者の身を気遣う姿】(D) 【思う通りではないことは自分をたのみに腑に落ちるように過ごす姿】(E) 【自分の心身の状態を認めて他者に伝え応じる姿】(E)
他者との掛け合い・話題・物を通して自ら表出していく姿	【持ちかけられる話題や物から生じる感覚や思い出を次々と研究者に語る姿】(C) 【他者との掛け合いの中で強さやユニークさを開示していく姿】(E)
人・物事・音楽が作る場に同調し、体で調和していく姿	【慣れた場で目や耳を向ける、人や物事の些細な変化を見届けながら過ごす姿】(D) 【他者の作る雰囲気と同調し、調和していく姿】(D)
周囲の他者に意識を向け、影響される自分が他者に働きかける姿	【恩ある相手に確かに感謝し、尽くそうとする姿】(A) 【まごつく相手や残された仕事を見かね、自分で片づけていく姿】(B) 【いつもの席で周囲の人をもてなし気にかけて自分が働く姿】(C) 【いつもいるこの場の人の気配や持ち物に影響されている自分を言葉に表す姿】(C) 【相手の言葉に合わない言葉でも、相手がいるからこそ発する姿】(D) 【自分がありつつ他者のいる場へも意識を向ける姿】(E)
他利用者と共有する生活の中に自分を折り合わせ、保ち、開示する姿	【自ら作り出す和やかな場で元来の自分を開示する姿】(A) 【他利用者と共有する生活との折り合いをつけた自分のあり方を保つ姿】(A) 【他利用者との生活の中に生きてきた自分のスタイルでの生活を合わせている姿】(B)
自分にとって意味をもつ相手との距離をはかる姿	【他者とは異なる家族との距離感を見せる姿】(A) 【相手に対して抱く感情が直接伝わらないような姿勢で距離を取る姿】(B) 【世話を焼き、他者に聞かせたい人の傍にいる姿】(E)
直接体に伝わるものに手の動きや表情で応じる姿	【体に伝わる温かさを確かめ、綻ばせる姿】(D) 【他者からの働きかけや体の状態に応じて表情や体が動く姿】(D) 【相手の顔を見、手を握り安らぐ姿】(E)
他者からの働きかけを契機に物事へ向かう姿	【他者からの働きかけをきっかけに物事へ向かう姿】(C)
変化する状況と時間の経過に流されていく姿	【進退を迫る状況に応じるしかなく、示そうとする意思が立ち消えていく姿】(A) 【心配や不安が他者と過ごす時間の経過と共に消失していく姿】(A) 【納得できないまま促されて移動していく姿】(E)
新たな状況で切り替わる姿	【思う通りでないことも新たに見聞きし次へと切り替わっていく姿】(E)

グループ	集約されたカテゴリ (対象)
支える他者・作り上げた物と共に進んでいく姿	<p>【他者に支えられて不確かな自分を安定させていく姿】(A)</p> <p>【停滞する言葉や気持ちも、作り上げた物や他者の言葉と共に進んでいく姿】(B)</p> <p>【手助けする他者に体を任せ感謝する姿】(C)</p> <p>【困る自分が他者に任せるうちに安定していく姿】(C)</p> <p>【研究者に気付かせる言葉を遣い、自然と協力を得る姿】(C)</p> <p>【研究者に何度も確かめながら心地悪さや戸惑いを伴うことに対処していく姿】(C)</p> <p>【揺らぎながらも他者と共に定め進んでいく姿】(E)</p>
笑顔を誘い、他者と応え合う姿	<p>【苦手や勘違いに居合わせる他者と笑い合う姿】(B)</p> <p>【研究者と共に笑顔になるような言葉を交わし合う姿】(C)</p> <p>【他者の笑顔を誘う動きや表情で、他者と応え合う姿】(D)</p>

7) 【他者への控えめな言葉と裏腹な行動をとる姿】

こだわって仕上げた作品や自分の希望には、謙遜や他者の目に触れることのためらい、譲歩を言葉にしつつも、照れ笑いや柔らかな笑みを浮かべて、指先や目で見かけたり、しっかり伝え行動に移したりしていた。

8) 【働きかける他者のいる中で自分に向かっていく姿】

対象者らはおやつやお茶を職員や研究者から促されたり、食堂で他利用者と共に集まって過ごす場にいつつ、目の前のお茶を注がれたコップやおやつのお皿に注視しつついたり、拝むように手を合わせ続けていて、置かれている場とは途切れた自分のうちに向かっていく姿。対象者Eの一場面を例示する。

対象者Eはいつものように、食堂の中央にあるテーブルで、他の男性利用者と向かい合い座っている。普段は背を丸めずしゃんと車椅子に座っている印象だが、今日は朝から体が左に傾き、斜めに沈み込むように車椅子に座っている。挨拶をしてきた研究者に気づくと、ぱっと目を合わせて「もう、どこかに行って来たんでしょ」と、唐突に話す。研究者は対象者Eの言葉の意図がつかめず「私は、今来たところなんですけど」と応えると、「今？あ、そうね」と一旦納得したようだったが、「向こうが船着き場？」と尋ねる。研究者は対象者Eの尋ねた場所について説明するが、その説明に対象者Eは応えず、視線を正面に向け黙り、体を傾けたまま座っている。

9) 【過去を想起し、今ここで抱える思いを傍にいる他者に明かす姿】

過去から今、そしてこれからの連続する自分の人生の歩みと移ろいが、感情や状況、自然などの今実感する生活を通してみるからこそ俯瞰するように想起され、今だから抱える諦念や侘しさとして、傍で聞く他者へ明かされていた。

10) 【了解し認める自分をもって他者に応じ収めていく姿】

対象者らは自身で了解して認め、自分自身を頼りにして相手に応じ、他者とやり取りする場を能動的に収めていた。

11) 【他者との掛け合い・話題・物を通して自ら表出していく姿】

他者との言葉や物のテンポのいいやり取りに表れている、連続性とリズムのある時間と空間の中で対象者は、次々と固有の感覚やユニークさが引き出されていた。

12) 【人・物事・音楽が作る場に同調し、体で調和していく姿】

会話のリズムや人や物の空間的挙動、音楽は時間と空間に一定のリズムを生み出し、対象者はその場のリズムに体の動きで調子を合わせるように同調していた。対象者Dの一場面を例示する。

午前中、いつも隣に座っている他利用者(対象者C)がいる中、対象者Dはいつものように車椅子で食堂のテーブルに向って座りながら、時々まどろみ過ごしていた。対象者Cは小さな本を見ながら、生まれ故郷での稼業について研究者に話している。しばらくすると(対象者D)は対象者Cの方に顔を向け、目をぱちりと開いている。対象者Cからはその様子は目に入らないが、対象者Cと対面している研究者とは対象者Dと顔が合い、研究者は対象者Dとも目を合わせ頷く。そうしていると、対象者Dは急に会話の間を縫って「うふふふ」と目を細めて声を出して笑う。対象者Cは研究者に体を向けて話し続けており、対象者Dは対象者Cの方に体を向けたまま、対象者Cの語りうんうんと頷く。研究者は対象者Cの話聞きながら、対象者Dへも目を合わせ一緒に頷いている。しばらくすると対象者Dは再び俯いてうとうとし始めた。

13) 【周囲の他者に意識を向け、影響される自分が他者に働きかける姿】

対象者らは、まごつく他者や周囲の気配、残された仕事に気づき、自分で片づけたり感謝を言葉にしたりして周囲に働きかけていた。

14) 【他利用者と共有する生活の中に自分を折り合わせ、保ち、開示する姿】

施設のスケジュールや他利用者の過ごす空間の中に、

これまでに生活してきた自分の生活も折り合わせ、部分的に維持したりすることで自分なりの過ごし方を開示していた。

15) 【自分にとって意味を持つ相手との距離をはかる姿】

家族や他利用者との関係性の中で、バランスのとれた距離をとって空間を調整していた。

16) 【直接体に伝わるものに手の動きや表情で応じる姿】

温かさや握った手の感覚は自分自身の体に伝わってくることで、対象者自身の動きや表情も溶け合うように応じていた。

17) 【他者からの働きかけを契機に物事へ向かう姿】

職員から声をかけられて、気に留めていなかった催し物やコップなどの空間へと視野が広がっていた。

18) 【変化する状況と時間の経過に流されていく姿】

施設の生活スケジュールや他利用者の動きなどの変化し経過する時間や空間の中で、対象者は促されるままに活動するしかなく流されていた。

19) 【新たな状況で切り替わる姿】

対象者にとって曖昧で合点がいけない不満や訴えがあるが、他者を見聞きし移動して了解したりすることで自分から行動し礼や感想を言葉にしていた。

20) 【支える他者・作り上げた物と共に進んでいく姿】

よくわからず渋々始めたり、言葉が途切れたりすることも、研究者や職員の言葉や手助け、自分で作り上げた物を見てはっとして次の行動に移っていき、自分自身を再認識していた。

21) 【笑顔を誘い、他者と応え合う姿】

相手の笑顔を誘う表情や動きでやり取りし、職員や研究者と笑顔や言葉を交わし合っていた。

VI. 考察

1. 表現する姿が示す他者と共に在る認知症高齢者の時間と空間との不可分な在り方と浮かび上がる関係性の多層的で交錯する様相

認知症を抱え生活する高齢者にとって、生きてきた長い時間の一部が失われることと、馴染みあるはずの場所や人、事物への認識が曖昧になることで起こる、生活の中でのつじつまの合わなさが、混乱や不安といった心理・行動症状を引き起こし自我の危機に直面させる生活障害だと考える。失われ脅かされるだけかのように見える時間や空間のパターンだが、存在自体が意識として取り巻く環境との内的つながりを有する統一的存在であることを前提とした本研究では、認知症高齢者の表現する姿としてどのように時間や空間が描出できたのかを示し、そこにおける他者と共に在ることについて考察する。

まず結果全体、全てのグループにおいて示したことは、施設で日常生活を営む対象者らが、過去から現在に至るまでの取り巻く生活の場と交流し、不可分であるということである。介護老人保健施設の入居者の一員である対象者らは、施設の生活スケジュールや職員による日常生活の支援、他利用者らとの共同生活で生じる、様々な他者との関係性の中に生きていた。さらに【共にいてくれる他者へ感謝を伝える姿】では、対象者らは日頃から自身の手助けをする職員や他利用者に対して感謝を伝えている。日本の高齢者にとって、これまでの生活においても世話になる人には礼を尽くすということは、社会生活を営む上で基本的な態度である。世話をする／されるという関係性やその中で対象者らの存在の仕方は、施設で新たに作り出されたというよりむしろ、これまでの自分たちの経験と取り巻いてきた他者との関係性に依拠していると考えられる。【相手をたしなめつつ自分を律しきれない姿】や【他者への控えめな言葉と裏腹な行動をとる姿】は、特に対象者個人がこれまでの経験で培ってきた人間関係の中に生き、その行動様式や活動パターンを維持しようとしていたことを示したと考える。

マーガレット・ニューマンは相互作用の共時性に関する研究をひきながら、「生体现象のリズムは、空間—時間に埋め込まれた物質（意識）の生き生きした描画である」¹¹⁾とし、「個人は時間と空間の複雑な網のような組織の中の参加者（participant）である」という主張に同意している。つまり、時間と空間が基本要素として組み込まれている本研究の結果全体は、認知症は過去の記憶や見当識を障害する疾病であるにもかかわらず、認知症高齢者はその場の時間と空間から分断されているのではなく、時間と空間の中に埋め込まれ生き生きとした存在として描出できることを明らかにした。

一方で、いくつかのグループでは認知症高齢者により特徴的だと考えられる姿を描出していると考えられる。

一つ目に【働きかける他者のいる中で自分に向かっている姿】は、認知症高齢者が取り巻いている今その時と交わりきれない時間や空間を示した。対象者が、廊下や食堂などの他利用者や職員が行き交う場を見て、さらに研究者と言葉を交わしているように、そこに存在するだけでそうした場の時間や空間と交流しており不可分であると考えられる。しかし、その瞬間の対象者ら自身にとっては異なる時間と空間があり、これが今生活を営む関係性とは不可分でありながら、交じり合わない時間や空間の二重性があると捉えられる。

二つ目は時間と空間との同調性を示した結果を提示する。【自分自身でも揺らぎつつ、それでも探し続ける姿】

は、対象者が揺らぐ時間や空間の中で自分自身さえも揺らいでいることを示した。一方で【人・物事・音楽が作る場に同調し、体で調和していく姿】は、職員や他利用者のいつもの動きの中でつくられる定常的な場の動きやリズム、音楽によって作られるリズムの中で、認知症高齢者が体の動きで調和していくことを示した。これらが過去から現在に至るまでの取り巻く生活の場と不可分であるだけでない点は、動きやリズムのある時間と空間の中で、認知症高齢者が同質の動きで「同調する」ということである。さらに言語ではなく、動作やリズムに同調する体の動きといった非言語的な形態で表現する認知症高齢者は、人間として備わる根源的な環境との情報交流能力そのものであったと考える。ここで言及しておきたいことは、表現する姿として言語化された結果は、認知症の症状の増悪やケアそのものの善し悪しを示すものではないということである。たとえば、認知症高齢者が物を探し続けるという行動は看護者の立場でのアセスメントとしては看護上の「問題」と考えられるかもしれない。一方でアクティビティの音楽に合わせて体を揺らしていることは「レクリエーションのよい効果」と捉えられるだろう。しかし、本研究でこれらの結果が示していることは、こうした「善し悪し」ではなく時間と空間の中に生きる認知症高齢者の身体の動きを通じた同調性であった。すなわち、本研究の結果として描出した「表現する姿」それぞれの内容は、認知症高齢者の行動やケアの評価を考える以前の現象そのものである。同時に、21グループという多数の結果が示されたことは、「表現する姿」が多様な認知症高齢者の存在を言語化できる視点であるということを示唆し、認知症高齢者やその行動を初めから対象化することで表面的に理解することに活用されるのではなく、認知症高齢者と看護者自身を含む他者と共に在るその現象の本質的な理解に向かわせることができる視点として活用できると考える。

最後に、【今の生活で共に在る他者や物に経験・体験をつなぐ姿】は、対象者の過去の体験や経験が、今日の前に存在する聞き手や経験にまつわるなじみの品を接点にし、他者と共に在る現在の生活の中につながったことを示している。つまり、認知症高齢者が生きて経験したこれまでの取り巻く他者や物との関係性が、聞き手や馴染みの品という一点で現在の他者や物との関係性と交差する時間と空間の様相を浮かび上がらせたと考える。

以上により、本研究は認知症高齢者が看護者を含んだ取り巻く時間と空間全体と不可分であることを示し、今生活する場の他者との関係性だけでなくこれまでの人生における関係性や人間としての根源的な環境との関係性

が重層性を成している様相を浮かび上がらせたと考える。これらの多層的な関係性は、認知症高齢者の様々な言動を通じた環境との相互作用により、一つの現象として過去から今に至るようにつながっていることもあれば、交じり合わないことも、同調することもあり、その現象の短い時間の中で交錯する様相も呈していたと考える。認知症高齢者は認知機能の低下がありながらも、時間や空間と分断されるのではなく、これまで共に生きてきた他者や今取り巻く他者との関係性の中に生きており、「他者と共に在る」存在であったと示唆された。

2. 看護への示唆

本研究の結果からは、認知症高齢者が看護者を含んだ環境と不可分であることが示された。これは、「認知症高齢者の表現する姿」を視点として現象を捉えることで、看護者自身も含んだ環境全体に視野を広げ、看護者自身の在り方も振り返りつつ対象理解も実践方略も幅を広げることに寄与すると考える。

実践の中では、認知症高齢者のつじつまの合わない反応や生き生きと交流する様子を「不穏行動」や「BPSD」「その人らしい」と対象化することがある。これは、ケアに携わる専門職との情報共有やアセスメントの基本情報として行われていると考えられるが、対象化された時点で観察者の判断が入り込み、必ずしも情報の共有者と同様に捉えているとは限らない。さらに、一度対象化された情報は、再度現象に戻ることなく継続して活用されることで認知症高齢者本人のその時その時の在り方と離れていく危険性がある。本研究で示した「認知症高齢者の表現する姿」は、認知症高齢者をケア提供者の視点から対象化して捉えるのではなく、それ以前の時間と空間との全体的なあり様として認知症高齢者の姿を捉える視点を提示したと考える。この認知症高齢者の表現する姿を視点として言語化された現象に基づいて、ケア提供者同士で共有することで、一方向からではなく多面的な対象理解についてケア提供者同士で検討することに活用できると考える。

高齢者の自我発達に関する研究¹²⁾では、自己・自己の人生を受容するまでの経過の一部に〈人生を省察し、自己理解する私〉を位置付けている。本研究の結果からは【過去を想起し、今ここで抱える思いを傍にいる他者に明かす姿】が導出されており、認知症高齢者がその時々で揺らぐ時間と空間にいながらも過去から今に至る関係性の中で生き、想起された過去を今の自分の立場から振り返って語れることを示した。一貫した語りが困難である高齢者場合には、その時々により添い同調することが自我発達へ向けた支援につながると考える。

3. 研究の限界と今後の課題

本研究では、提供された看護実践を明らかにすることには焦点を当てていない。日本人型対人援助関係に関する研究では、「一旦相互作用が始まると、看護専門職の援助が発展し、対象にいい方向への変化が現れる。終焉では、対象は自己や他者に対する信頼を培い、新たな力を獲得し、この時点で看護専門職の目標が達成され、専門性を培う」¹³⁾と述べている。本研究でも相互作用が繰り返され、個別的で専門性のある援助、多義的な対象理解や援助に発展し、対象側では主体性の発揮といったアウトカムが産出されたと推察する。したがって、本研究で明らかにした他者と共に在る認知症高齢者の表現する姿及びこれを得ようとする取り組みは、認知症を抱える高齢者という対象の特性に応じた、対人援助関係の相互作用を生じる技法の一部としての活用可能性があるのか、今後は提供される看護実践を明らかにする必要がある。

また、【働きかける他者のいる中で自分に向かっていく姿】は、失認や失行、実行機能の障害、一過性意識障害の兆候が否定できない場面が含まれた。本研究は認知機能の程度や病型などを特定せず、看護職としての医療的側面からのアプローチに焦点を当てていないため、結果と身体的ニーズは直結しない。したがって、実践上は身体的側面のアセスメントと合わせて活用されることが望ましい。どのような看護援助が行われていたのかという視点からの検討もすることで、実践活用への具体的な示唆が得られると考える。

最後に、施設を限定したことと対象者が女性のみであったことから、結果は他の療養環境で対象者に男性を含んだ場合の検討が必要である。特に本研究の結果は、どのような場であったかに影響を受けるため、生活主体の施設で行ったために、結果として示したグループも多くなった可能性がある。病院や在宅ではどのような結果が得られるのか今後も研究を重ねる必要がある。

VII 結論

本研究は、介護老人保健施設に入居している認知症高齢者女性5名に、施設職員と共に日常生活援助を行いながら、参加観察した「対象者の状況を含めた場面の記述」を質的帰納的に分析し、他者と共に在る認知症高齢者の表現する姿を明らかにした。

本研究で導出した21グループの「他者と共に在る認知症高齢者の表現する姿」は、認知症高齢者が看護者を含んだ取り巻く時間と空間全体と不可分であることを示し、今生活する場の他者との関係性だけでなくこれまでの人生における関係性が多層的で交錯している様相を人

間としての根源的な環境との在り方として浮かび上がらせた。本研究は認知症高齢者の反応を対象化する以前の時間と空間とに不可分な全体的なあり様としての現象への観察と言語化の視点を与え、多面的な対象理解と環境アプローチに活かせると示唆された。

謝辞

本研究へご尽力くださいました施設長、看護管理者をはじめ施設職員の皆様、研究へご協力いただきました皆様とご家族に深謝いたします。

本研究は修士論文を一部加筆・修正したもので、補助および助成はなく、本研究に係る利益相反状態は一切ありません。

引用文献

- 1) 内閣府HP, 平成27年版 高齢社会白書, <http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/index-w.html> (2015/09/08入手)
- 2) 厚生労働省HP, 社会保障審議会 介護保険部会 (平成25年6月6日) 資料「認知症有病率等調査について」, <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r98520000033t43-att/2r98520000033t9m.pdf> (2015/09/08入手)
- 3) 小野幸子: 老年看護学概論「老いを生きる」を支えることとは 老年期の理解 (正木治恵, 真田弘美), 初版, 南江堂, 2011.
- 4) 室伏君子: 認知症高齢者に対するメンタルケア, 老年精神医学雑誌, 19 (増刊号 I): 21-27, 2008.
- 5) 3) 再掲
- 6) 松田千登勢, 長畑多代, 上野昌江: 認知症高齢者をケアする看護師の感情, 大阪府立大学看護学部紀要, 12(1): 85-90, 2006.
- 7) 細川淳子, 佐藤弘美, 高道香織他: 痴呆性高齢者のグループ回想法実施時における表情変化の特徴, 老年看護学, 8(2): 81-88, 2004.
- 8) マーガレット・ニューマン: マーガレット・ニューマン看護論—拡張する意識としての健康—, 第1版第7刷, 医学書院, 1995.
- 9) 大塚俊男, 本間 昭: 高齢者のための知的機能検査の手引き, 初版, ワールドプランニング, 1991.
- 10) 柄澤昭秀: 行動評価による老人知能の臨床的判定基準, 老年期痴呆, 3: 81-85, 1989.
- 11) 8) 再掲
- 12) 小野幸子: 看護援助による高齢者の自我発達の経過—女性高齢者1事例の検討結果より—, 千葉看護学会誌, 3(2): 50-59, 1997.
- 13) 正木治恵, 清水安子, 田所良之他: 「日本型対人援助関係の実践知の抽出・統合」のための理論的分析枠組みの構築, 千葉看護学会誌, 11(1): 55-62, 2005.

THE EXPRESSION OF OLDER PEOPLE WITH DEMENTIA LIVING IN RELATIONSHIPS WITH OTHERS

Yuria Toda ^{*}, Mariko Tanimoto ^{*2}, Harue Masaki ^{*}

^{*} : Graduate School of Nursing, Chiba University

^{*2}: Tokyo Healthcare University

KEY WORDS :

expression, older people, dementia, environment

Aim To describe the expressions of older people with dementia in a nursing home. Older people with dementia often have difficulty maintaining their intention and expressing it to communicate with others. However, they also can spend meaningful time with liveliness. To describe the phenomena which do not distinguish the subject and object of the act, regard individual and environment as a unitary whole. The term 'expression' is used to mean the relationship between inner world and environment.

Method Data were collected through observations of five nursing home residents with dementia, aged 80-90 years old. One researcher spent 33 days helping to take care of them with the nurses and caregivers, focusing on daytime care. Detailed descriptions of the residents' behavior, responses to events and familiar objects, and speech were analyzed using qualitative and inductive methods.

Findings In total, 21 possible states were identified, including 'connected', where experiences are connected to other people and familiar objects; 'harmonized', where the body is used to make connections with other people and objects; and 'facing', a tendency to look at oneself.

Conclusion This study suggests that older people with dementia existed indivisibly with the time and space. Moreover, the expressions of older people with dementia suggests that recent relationships and cultivated relationships to surround older people overlapped and crossed. By placing the expressions of older people with dementia as point of view, we can catch the relationship of environment and older people with dementia. In addition, it is made use of for care providers understanding older people with dementia from many sides.